2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2022年7月1日発行　SSKW増刊通巻5699号

SSKW

巣立ちだより

No.57

今、考えること

田尾有樹子

巣立ち会理事長

楽観的な未来を考える

今年の初めには考えてもいなかったことがこの2月24日に起こった。世界中の誰もがこんなことが起こると予想していなかった。プーチンの老害なのか、コロナのための孤立化が及ぼした弊害なのか、はたまた用意周到に計画されたことなのか、誰にも分からない。わかっていることはこのロシアによるウクライナ侵攻によって当のウクライナ以外の人々も大きな影響を受け、世界中が悲鳴を上げているということである。こんなことがあっていいはずがないと思いながらも、現実に起こっており、その事実を否認しては前へ進めない。本当に苦しい選択を迫られる数か月を我々は過ごしてきている。このことが世界をより大きな悲劇に陥れる可能性は大きく存在している。

しかし一方で、日本は第二次世界大戦の時、３００万人の邦人を失いながらも、たくましく生き残ってきている。どんな状況の中からも人がわが身の過ちに気が付きそこから立ち直る方法を人類は持っていると信じるに足る歴史は存在する。どうせ先が見えないのなら少しでも楽観的な未来を考える方が気が楽になる、そう考えるのは私だけであろうか。

もう一つの対処として、先が見えずに不安な時はまず目の前だけを見るということも私が心がけてきた生き抜くための処世術である。

今、考えること

若者に対するシームレスな学業・生活支援

　そうして目の前のことに目を向けると、今年、福祉医療機構に申請をして、「学生等の若者に対するシームレスな学業・生活支援」という事業の助成を受けることになった。わかりやすく要約すると受診をしていない人にもユースメンタルサポートColorの支援を受けられるようにしていくという事業内容である。自画自賛ともいえるが、Colorの支援をしていて、タイムリーに若者に対して適切な支援をしていくと驚くほど彼らが成長することを実感し、必ずしも精神科を受診していなくても生きづらさを感じている若者に対してシームレスな支援をしていきたいと考えたのである。この考えに従って、大学から通信制の高校まで、何カ所かの学校に足を運んだ。教育委員会にも久しぶりに行った。様々な人と話し合い、少しずつ手ごたえを感じている。すぐに結果に結び付くかどうかは不明だが、みんな同じようなところに問題意識は持っているということが実感できた。

　今日会った、20歳の女性の母親は「こんな場所があると思っただけで、励みになります。こんな場所があることを知りたい人はもっと大勢いて、多くの人に知らしめるべきです。」と私を励ましてくれた。そんな言葉を頼りに、これから先、若者支援をもう少し世の中の人に知ってもらい、狭義の精神疾患を持っている人以外にもこのサービスを利用してもらえる仕組みを作りたいと考える。

　巣立ち会がまた一歩進んでいくことを皆さんには見守ってもらいたいと思う。

休みがちな高校生の
心も勉強もサポートします

小学校や中学校は少し休んでもどうにかなったのに
高校はたった１日休んだだけで
授業内容も宿題もどんどんわからなくなっていく

提出物が出せそうにない
授業がついていけない
一緒にひとつひとつ片付けていきましょう

学校に戻るために
勉強のお手伝いをします

社会福祉法人巣立ち会　学習支援（無料）平日9時～17時
サザン　東京都三鷹市上連雀1-1-3　Tel：0422-56-8261
シンフォニー　東京都調布市小島町2-55-4　Tel：042-426-8099

2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2022年7月1日発行　SSKW増刊通巻5699号

三鷹市精神障がい者地域支援連絡会　加藤進昌氏講演会

発達障害者の自立に向けて

5月28日（土）東京大学・昭和大学名誉教授で公益財団法人神経研究所理事長の加藤進昌先生より、発達障害の治療・支援の最前線について講演いただきました。当日は会場55名・オンライン54名と109名の方が参加されました。

講演前半では発達障害の概念の歴史的変遷について、先生の臨床経験をもとに話していただきました。先生は、東京大学医学部附属病院では「子どもの発達障害」の臨床にあたられていたそうです。ですがあるとき、治療対象のお子さんのお母様の診察に当たることを機に、問題となる状態像を当時の精神医学的概念では説明しがたい事実に直面され、それまでの知的障害を伴う発達障害概念とは異なる「大人の発達障害」という概念への気付きや概念の整理につながったという貴重な話を伺うことができました。

その後は、先生が尽力されてきた「大人の発達障害」臨床・研究の中から築いてこられた発達障害をもつ人の社会復帰や自立にむけて必要な支援や仕組みについて、話していただきました。2008年昭和大学附属烏山病院院長に就任されて、日本で初めての「大人の発達障害」を専門とした外来及びデイケアを開設されます。発達障害に対する薬物治療や精神療法には限界があり、心理社会的治療の有効性を取り入れたASD・ADHDそれぞれ専門のショートケアプログラムを開発、メディアに取り上げられると「大人の発達障害」という概念はさらに社会に広まりました。烏山病院には日本全国から、患者さんご本人の状態に関する相談にとどまらず、夫婦関係に生じる問題、親御さんからは自分の亡き後への不安等々、多岐にわたる相談が続々と寄せられ、

講演中の加藤氏

それらをとりこぼすことなく、家族支援プログラム、大学生プログラム、ピアサポートプログラム等の開発に結びつけておられます。

講演終盤には今現在も進行中の、8050問題化させないための支援モデルを目指したASD当事者と家族が共に学ぶ自立促進プログラムの開発や、新・晴和病院再開発計画によせて、障害福祉サービスを含む、医療・心理・家族・就労・法律・地域を網羅したワンストップサービス提供の実現により、障害者から納税者へと転換を図るべくサポートしていきたいという、正にシームレスな支援を可能とするビジョンを伺うことができました。

巣立ち会では現在、先生の協力も得て昭和大学附属烏山病院の発達障害デイケアにて当法人スタッフが学ぶ機会を頂いています。講演の途中、医療現場ではこの先「発達障害NOS（従来の精神科診断体系のどこにも入らない）」の方たちへの臨床が始まる気がしているとの話が聞かれました。我々地域現場では、診断のない方や診断内容に疑問をもたれている方との出会いもあります。この先、生きづらさを抱えた方々とお会いしていく際に、我々なりに、我々だからこそ提案できるプログラム他、サポート体制整備やシームレスな連携のあり方を模索するべく、今後も努めていきたいと思います。　（染谷）

2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2022年7月1日発行　SSKW増刊通巻5699号

新人職員研修

はじめまして。巣立ち風で働いている吉澤と申します。2021年に巣立ち会に入職しました。普段はメンバーと外作業（アパート清掃、除草など）に行ったり、生活の中での困りごとを聞き、どうしたらよいか一緒に悩み、考えています。今回5月9日に新人研修が行われ、コロナ禍の影響もあり約２年ぶりの開催となりました。今回の研修では理事長の田尾から巣立ち会の歴史やこれまでの活動についての話を聞きました。私は入職して1年と少し経ちましたが、新人研修を受けるのは初めてだったので、日頃自分がやっていることと巣立ち会全体の取り組みとのつながりを知ることができ勉強になりました。

特に、私は今回の研修で“人の自由”について深く考えさせられました。具体的には、これまでの生活の中で自分に自由があるのは当たり前のことで、あらためて保障されているかどうかなど考えたことがありませんでした。しかし今回の研修を受けて、長期入院している方にとっては自由が当たり前なことではなく、入院生活の中で奪われてしまっているのだと考えさせられました。巣立ち会はこのような人達の“自由”を守っていくためにも病院と地域の結び役となり、入院している方が地域に出て自由に生活していけるようにサポートしているのだと分かりました。私も巣立ち会で働く中で、退院し地域で暮らしはじめた方の表情が少しずつ柔らかくなっていく姿を見て、地域でその人らしく生活することがどれほど人にとって大切なのかを感じています。これから私も巣立ち会の職員として、どんな人も地域でその人らしく自由に生活していけるようにメンバーと一緒に悩み、考えながら活動していきたいと思います。

（吉澤）

中堅職員研修

6月2日に中堅職員研修を行いました。講師は元調布市役所子ども生活部長、福祉健康部長などを歴任された山本雅章氏。

まずはその定義として、中堅職員の役割とはチームリーダーとして職場のチームを引っ張っていく存在でなければならないということ、そのリーダーとして必要なことは何かを学ぶ研修でした。具体的にはリーダーに求められるもの、新人への教育、リスクマネジメントへの対応など私自身日常を振り返った時、やれているだろうか、やれてこれたろうかと自身への戒めの気持ちも湧いてきました。

特に講義の最後のテーマである自己覚知については、今回の研修を機にあらためて自分自身に問いかけてみました。「なぜ、この利用者に対しては安心したり不安になるのか、あるいは激しい憤りを感じたり、心底から同一化して同情心でいっぱいになるのかなど」普段の利用者さんとの関わりについても客観性を持って見直す意識が持てました。

私自身が新人の教育についても得意ではありませんが、それでも普段、必要最小限、常識を踏み外さない程度には、支援者としての関わり方や情報などは伝えてきたつもりでしたが、きちんと体系的に伝えられていたかというと甚だ疑問です。従って法人の一員として、他の中堅職員の方々とも定期的にこういった話ができると望ましいと思いました。

今回の中堅職員研修は取っ掛かりとして色々なことを考えさせられた良い研修でした。今後もこのような研修を継続することが法人の更なるレベルアップにつながるのではないでしょうか。

（山本）

WRAPファシリテーター研修

GW中の5日間、WRAP(元気回復行動プラン)のファシリテーター研修に参加しました。「自分自身のトリセツ」とか「自分で自分をデザインする」と言われるWRAPですが、2月の集中クラスの際、本当に自分で1から作っていくことに驚きました。しかし私はそこに魅力を感じました。最初は少し身構えた「キーコンセプト」や「元気に役立つ道具箱」も、考え始めるとそれほどの難しさは感じませんでした。それよりも、誰に見とがめられることもなく、ゆっくりと自分自身に問いかけながら、思い浮かんだことがらを一つひとつ拾い上げていく作業はデトックスのようで、大変心地良い作業でした。

そして今回のファシリテーター研修。WRAPの魅力を伝えていくため、考え、発表し、共有し、そしてさらに考えを一歩深める。ひたすらその繰り返しでしたがなんとも楽しい5日間でした。WRAPは治療プログラムではないと言われます。「治療」だと、する側とされる側がありますが、WRAPはあくまでも自分で考えた自分のプランです。プランは自分の一部だから身近で取り出しやすく、いつでも追加・修正・変更を自分自身で行えます。この持続性や柔軟性がWRAPの良さやおもしろさだと改めて感じた5日間でした。研修中なんども2月に作った自分のプランを見返し、どんどん変化させていきました。WRAPはいつも今現在の自分自身。過去にとらわれず、未来を恐れず、今の自分と共にある。WRAPを私も伝えたいと強く感じた研修となりました。　（玖津見）

当日のワーク場面

WAMの若者事業

若者への切れ目ない支援を目指す新事業を開始

今年の4月より、独立行政法人福祉医療機構（WAM）の助成を受けて、「学生等の若者に対するシームレスな学業・生活支援事業」を開始しました。

これまでシンフォニーとサザンにおいて、10代半ばから20代前半までの若者を対象に学業支援や就労支援を含むさまざまな相談支援を行ってきました。しかし、障害福祉サービスという枠組み上、精神科を受診して医師の診断を受ける必要があり、そのことが支援に繋がる上での大きなハードルとなっています。一方、幼年期から思春期にかけての支援が思春期から青年期という人生において重要な時期の支援に繋がっていないという問題も感じていました。

この事業は、思春期から青年期の若者を対象に、年齢や制度の壁を越えた切れ目ない支援を提供し、そうした支援を可能とする仕組みや制度を作ることを目的としています。具体的には、現在、シンフォニーとサザンで、精神科に通院していない方も含めた学業支援や就労支援を開始し、大学との連携に向けた会議体、制度づくりに向けた近隣市の担当課との会議体の準備を進めています。今後、講演会等も予定していますので、詳細や最新情報についてはQRコードからホームページをぜひご確認ください。

（植田）

「学生等の若者に対するシームレスな学業・生活支援事業」Webサイト
https://sudachi-kai.or.jp/youthsupport/

2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2022年7月1日発行　SSKW増刊通巻5699号

風間暁氏講演会

「生きてさえいれば　何度でもやり直せる」

今年のピアサポート事業講演会（正式名称：三鷹市精神障がい者自立支援事業講演会）の講師は講演１か月前から新聞紙面に登場されていました。来年４月施行予定の「こども家庭庁」を「こども庁」へ名称変更すべく、現在も尽力されています。そこにはご自身の被虐待当事者のお立場から、家庭単位ではなくこども個人に目を向けた名称にしてほしい、という想いが込められています。「ことば」を大切にする方が三鷹市にやってくる～当日会場に現れた風間さんが発することばは、複数のマイノリティ体験に裏打ちされたもので、百名を越える参加者を魅了しました。

今回の講演会では「生きてさえいれば何度でもやり直せる」という力強いメッセージが語られました。幼少時の親からの虐待、両親離婚後、非行グループと出会い、施設生活を経て、解離性障害、物質使用障害、難病の診断。現在は子育て真っ最中で、２人のお子さんが発達障害をお持ちです。同時に保護司、文筆家、写真家、ASK社会対策部薬物担当、マイノリティが安心して過ごせるカフェオーナー、それに加えてお話も上手でスライドも芸術的で、、、と、２時間があっという間に過ぎました。以下、多くの方の感想にあがった風間さんの「ことば」をご紹介します。

風間さんの体験をきいて、よく「私なんて足元にも及ばない」という感想をもたれることがあるそうです。風間さんは「感情は絶対的に主観で良い。ただ行動は変えないと。あなたが苦しいと感じたら、それが全てだ。私は私の人生を生きていい」と仰います。また、講師の「経験が価値に変わる」ということばは、経験自体が稀であるために周りの理解が得難く、ちょくちょくしんどい思いをすることのある参加者の希望になりました。

そして、「ふざけんな！」の精神です。子供の頃から周りに否定し続けられ、ようやく反抗することを覚え、この世の中への激しい怒りが湧き上がったそうです。そんなある日、

講演中の風間氏

お子さん達の寝顔をみていたら、この子達はこんな世界で生きていかなきゃいけない、だったら、この爆発的な怒りをエネルギーにかえよう、と生まれた精神だそうです。理不尽な出来事が起こったときに「ふざけんな！」と感じることができる、それを力に変換できる。最強のパターンを実現される風間氏に、当会設立の精神に通じるものを感じました。まずは自分自身の気持ちを大切にすることを目指していきたい、と改めて思った次第です。風間さん、大切な言葉の数々、ありがとうございました。

（大平）

コロナ戦線最前線

原稿を書いている本日6月12日現在、コロナ感染者数は東京都1,526名、三鷹市22名、調布市27名、と第6波もだいぶ落ち着き、減少傾向となってきている。ただならぬ緊張感の中の奮闘の日々であったにもかかわらず、たった約2か月前の事なのに、かなり記憶が薄くなりつつあるというのが正直なところである。

3月末から4月初旬にかけ、こひつじ舎では3名の感染者が出た。1名落ち着くと次、1名落ち着くと次という気が休まらない状況。当時の殴り書きのメモを見ながら思い出してみると、陽性者が確定してからは、保健所をはじめ、行政、訪問看護やヘルパー、通院先等の関係機関への連絡、利用者・家族への説明、各仕事の業者への連絡・調整と一日中電話をしている状況であった。不安からか私自身も、のどに違和感を覚えるような気がしてきたり、体がいつもより重い気がしてきたり、緊張感の中での連絡調整の連続であった。登録者が110名という多さもあり、とにかく目の前のことを粛々とやるしかないと信じて電話をかけ続けていた。利用者の不安に対し相談にのり、心配な人には抗原検査、臨時のＰCR検査の手配、実施、結果待ち…感染者が単身者だったこともあり、土、日曜日も含めた健康観察の電話でのフォロー等、経験をしたことが無い緊張感の毎日であった。幸いなことに、3名とも軽症で10日後には日常に戻ることができた。この緊急時に、職員一同一丸となり、早朝に集合して段取りを組み、役割分担通り迅速に動くことができ、この局面を乗り越えられたのは、このチームワークだからこそと痛感できた日々であった。

今後も第７、８波はくる可能性はあるが、換気、ソーシャルディスタンス、黙食、ワクチン接種等のできうる限りの感染対策を利用者とともに実施しながら、コロナウイルスにひるまず向かい打ちたいと思う。

（那須）

「グループホームからみたコロナ禍」について。現在（7月11日）、第7波が押し寄せてくると同時に利用者1名の陽性者が出て、ホーム自室での療養となっている。幸い発症3日目には熱も36度台に下がり、今はチェックシートに沿って本人に体調を確認しながら、食事等を届けたりしつつ今週末の療養期間終了まで見守っているところである。

居住施設ではあるものの当会のグループホームは全てがアパートタイプなので、一戸建てタイプと比べるとクラスター発生の可能性は低く、実際にも起こっていない。この2年あまりで今回が4人目の利用者の陽性者だったが、それぞれの感染に関連はない。2名は入院先の病院で陽性が判明してそのまま入院治療で軽快した。1名が自室での療養だったが、こちらも軽症で1週間で軽快した。もちろん、陽性者が出ると本人への対応以外にやらなくてはいけないことが多く発生するので、そこは那須さんが書いてくれた実感と変わりない。昨年の中頃？に濃厚接触者の定義が整理されてから気分的に少し楽になったとはいえ、今でも「利用者（または職員、またはその家族）が発熱！」との報告を受けると身体がギュッと緊張するのがわかる。世の中の感染者が増えるというのはそういう場面が増えるということであり、その都度の判断を間違えないように気を張ってやっている。

最後に、調布市や三鷹市にはワクチンの優先接種等で配慮を頂き、本当に助かった。お礼を申し上げたい。一方で東京都は、職員に1週間後に結果がわかるPCR検査を押し付けてきたりと、やっていることが現場の感覚とずれていて「助かっている」という感じにならない。改善してもらえればありがたい。　（長門）

2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2022年7月1日発行　SSKW増刊通巻5699号

巣立ち会初となる永年勤続功労金を授与しました

令和4年3月30日に巣立ち会設立後、初となる永年勤続功労金を授与しました。巣立ち会では、勤続年数が満10年以上の常勤職員のうち満65歳に達するまで勤務した職員に対し、永年勤続功労金を支給すると定めています。このたび、斉藤裕子さんと丸山和子さんの2名に授与されました。　（榎本）

巣立ち会 賛助会からのお知らせ

巣立ち会 賛助会　令和3年度収支報告

収入		支出	
項目	金額	項目	金額
会費収入	822,000	事務費・支払手数料	95,401
受取利息収入	23		
前期繰越金	5,581,615	次期繰越金	6,308,237
合計	6,403,638	合計	6,403,638

【令和3年度・令和4年度分として　順不同】
塚本能子様、小野正枝様、波夛野洋子様、姫本昭夫様、会田孝太郎様、山崎秀子様、飯野和典様、村瀬信子様、野田廣様、鈴木正子様、医療法人社団欣助会　吉祥寺病院様、菅野俊美様、和田成子様、櫻井錠治様、梨木信彦様、佐藤弘章様、長谷川病院デイケア科様、横山恵美子様、阿部康代様、田尾勢津子様、渡邊正徳様、星野和子様、糠信涌子様、宮田雄吾様、吉田輝久様、山田昭徳様、村田眞様、村田眞男様、青木鉄次様、林雅美様、中村克美様、田村博様、岡﨑秀昭様、山田千代様、藁谷みち子様、境野伸二様、高坂正男様、大坪節子様、加藤力弥様、渡邊衡一郎様、松石俊郎様、株式会社　東部第一様、かささぎ会　江頭由香様、鎌恵子様、村井俊二様、小林靖宜様、立川聖パトリック教会様、熊谷スミエ様、大島巌様、柏木彰様
〈令和4年1月5日から令和4年6月21日到着分〉

たくさんの方々から、会費や寄付をいただいております。ご支援ありがとうございます。

巣立ち会の活動にご協力をお願いします。

賛　助　会　費

●年会費　　一口　　3,000円
●郵便振替　　口座番号　00140-4-542860
●加入者名　　巣立ち会 賛助会　　巣立ち会 賛助会　会長　松岡恒夫

編集後記

今回の号はコロナ禍の中、この半年サザンで行われてきた講演会、研修会の記録が盛りだくさんです。
世の中まだまだ捨てたもんじゃない、それぞれがそう思わせてくれた時間でした。すべての講師の方々に感謝致します。　（山本）

発行所　〒157-0072　東京都世田谷区祖師谷3-1-17
ヴェルドゥーラ祖師谷102
特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会
定価　50 円
編集　社会福祉法人巣立ち会
〒181-0014　東京都三鷹市野崎2-6-42
電話　0422-34-2761
E-mail: sudachi-kaze@sudachikai.eco.to
http://sudachikai.eco.to/